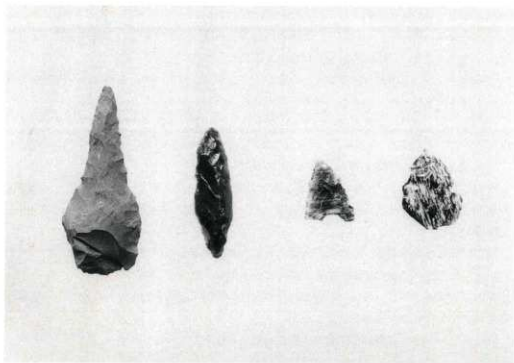


瀬戸山 I - a 遺跡発掘調査概報



1987

掛川市教育委員会

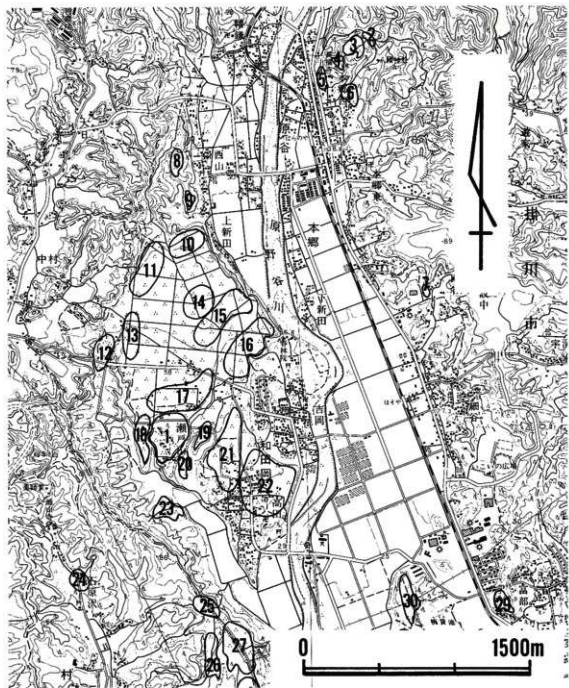
例 言

1. 本書は、昭和61年10月23日から昭和62年3月31日まで実施した静岡県掛川市吉岡字花ヶ脇1627外に所在する瀬戸山Ⅰ-a遺跡の発掘調査概報である。
2. 発掘調査地点の地籍は掛川市吉岡字花ヶ脇1627である。
3. 発掘調査は、瀬戸山Ⅰ遺跡地内で計画された茶園改植に先立つ緊急の発掘調査で、国および静岡県の補助金を得て掛川市教育委員会が実施した。
4. 発掘調査では、土地所有者の原田つよ氏ならびに原田享司氏、周辺土地所有者の鈴木英年氏には、埋蔵文化財に対し多大なご理解とご協力を頂いた。
5. 発掘調査は、掛川市教育委員会の松本一男が担当し、市内在住の戸塚和美君に多大な協力を得て行った。また袋井市在住の前田庄一氏には現地で実測作業のお手伝いをしていただいた。
6. 発掘調査ならびに整理調査では次の方々参加を得た。
戸塚和美・鈴木きの・大場せつ・大場しま・大庭三代子・小沢ろく・久保田まさ・鈴木辰江・鈴木はつ子・松浦せい子・萩田百江・萩田みさ子・萩田ふさ・鈴木操・宮崎充子・佐藤かやの・石川豊子
7. 本書の編集は松本が行い、遺物の実測・トレース・執筆ならびに遺構全体図のトレースについては戸塚が行い、他の作業の全てと執筆は松本が行った。
8. 発掘調査事業業務は、掛川市教育委員会教育長伊藤昌明・社会教育課長安達啓・文化係長岩井克允のもとに社会教育課が所管した。
9. 調査によって得た資料は全て掛川市教育委員会が保管している。

目 次

1. 発掘調査と遺跡の概要 (松本)	2
調査に至る経緯と調査の目的	2
調査の方法と経過	2
遺跡の位置と周辺環境	3
2. 調査の内容 (松本)	6
遺 構	6
遺 物 (戸塚)	14
3. ま と め (松本)	19





遺跡地名

- | | | | | |
|-----------|---------|-----------|----------|--------------|
| 1. 瀬戸山Ⅰ遺跡 | 7. 殿ノ台 | 13. 溝ノ口原 | 19. 瀬戸山Ⅲ | 25. 境前山 |
| 2. 八海山 | 8. 後藤ヶ谷 | 14. 中ノ原 | 20. 花ノ原 | 26. 東山 |
| 3. 又木郷 | 9. 中山 | 15. 高田上ノ段 | 21. 高田 | 27. 金駒原(久龍山) |
| 4. 安里山 | 10. 城ノ原 | 16. 吉岡下ノ段 | 22. 女高 | 29. 二反田 |
| 5. 長福寺 | 11. 東原 | 17. 吉岡原 | 23. 平田ヶ谷 | 30. 岡津原Ⅰ |
| 6. 古城 | 12. 今坂 | 18. 瀬戸山Ⅱ | 24. 石原沢 | |

第1図 遺跡の位置と周辺の弥生後期～古墳前期遺跡

1. 発掘調査と遺跡の概要

《調査に至る経緯と調査の目的》

掛川市街地から国道1号線を西に車で10分程進むと、袋井市との境を流れる川“原野谷川”が横たわる。この原野谷川は、掛川市の北部白光山赤メゾレ山にその源が求められ、南、西、南へと向きを変えながら袋井市域を流れる太田川へと流れ込む。その長さは28380mで、掛川市域を流れる河川の中で最も長い川である。またこの原野谷川流域には、上流より中・小さまざまな大きさの河岸段丘が発達しており、そこには数多くの遺跡が分布している。今回紹介する瀬戸山I-a遺跡も、原野谷川が形成した河岸段丘通称“吉岡原”上に立地する遺跡である。

この吉岡原周辺の河岸段丘上には、現在茶園が広く経営されており、茶の生産量日本一を誇る掛川市域にあって屈指の地帯となっている。いつの時代・何事にも改良事業はつきもので、この茶樹栽培においても近年より度重なる改良が行われている。この改良では、水はけを考慮した耕作土の入れ替え（地表土と地山土との転換“天地返し”）が取り入れられており、大地に刻まれた人々の足跡“遺跡”に思わぬ被害をもたらす結果となった。

今回調査の対象となった瀬戸山I-a遺跡のこの地点でも茶園改植の計画が上がり、遺跡の消滅が免れない状況となった。そこで掛川市教育委員会では国と静岡県からの補助金を得て、遺跡の記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなった。

《調査の方法と経過》

今回実施した発掘調査地点は、原野谷川が形成した河岸段丘“吉岡原”南端部付近の標高57m程に位置し、周辺は舌状台地を呈している。

現地調査では、まず調査区の設定を行い、昨年確認した土層観察状況に従い重機による耕作土の掘削作業を行った。引き続き人工により調査面の精査・遺構確認を行い、並行して杭打ち作業を行った。杭打ちは、調査地の北東角の地境杭を基点として南東角の地境杭を見通し基点から5m毎に杭を打ち込んだ。そして機械の頭を90°西に振りまた基点から西方向5m毎に杭を打ち込んだ。さらにこれら基本の杭列から調査地内へと杭打ちを行い小区画の設定を行った。こうして設定した小区画の名称は、第3区遺構全体図に示したように北から南へ5m毎に1・2・…・5・6、東から西へ5m毎にA・B・C・D・Eと呼称し、東西列のA～Eと南北列の1～6とを掛け合わせて、(A-1)グリッド、(B-3)グリッド、…と呼ぶことにした。調査では、遺構の検出位置、遺物の出土位置などは全て上記小区画名称により表現しており、本報においてもそれに従った。

調査時における遺物の取り上げは、遺物の所属する遺構が明確な場合には○遺構出土遺物と

して一括取り上げたものもあるが、基本的には遺構外出土遺物についても全てドット化して取り上げている。

現地での図面については、小区画に合わせて20分の1縮尺で遺構全体図を作成し、遺構内出土遺物・主たる遺構の実測図については10分の1縮尺により作図した。

写真による記録は、ブローニーサイズ(6×7)原画白黒、35mmサイズ原画白黒・カラーリパサル撮影により行った。



発掘作業風景

《遺跡の位置と周辺環境》

瀬戸山I遺跡は、掛川市街地から北西に約10km程行った吉岡地区に所在する遺跡で、この吉岡地区の東側を北から南に流れる川“原野谷川”が形成した河岸段丘(吉岡原)の南城に位置する。現地へは、吉岡原を東西に横切る県道掛川山梨線を南に500m程入ると行き着く。



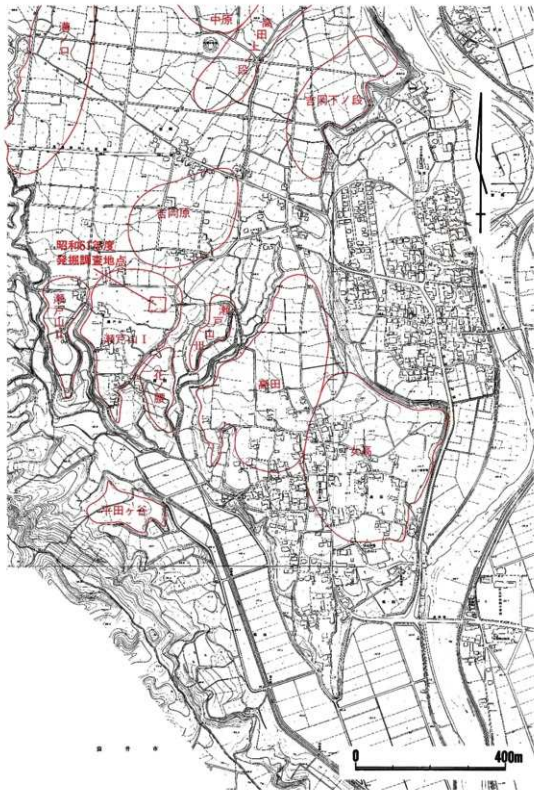
調査区埋戻し

瀬戸山I遺跡が立地する吉岡原の南城では、高田原(吉岡原の南側に続く河岸段丘面)の西側を入り込む谷が幾本にも枝分かれして小谷を形成している。これら小谷が入り込んだ谷頭部には瀬戸山I遺跡と同時期(弥生時代後期～古墳時代前期)の遺跡が多数存在する。今坂遺跡・溝ノ口遺跡・瀬戸山I～IIIの各遺跡・花ノ腰遺跡・高田遺跡などがそうである(第2図)。この他吉岡原あるいは高田原には、同時期の遺跡、東原遺跡・中原遺跡・城ノ腰遺跡・高田上ノ段遺跡・吉岡原遺跡・吉岡下ノ段遺跡・女高遺跡などが存在する。これらの内前の二遺跡が段丘面の内陸部に位置しており、他の遺跡は全て段丘面の縁辺部に位置する。

ところで、吉岡原・高田原と呼ばれるこの河岸段丘は大きく二つの段丘面に分けられ、上位段丘面は標高55～60m前後、下位段丘面は標高40～50m前後の高さを測る。さらに下位段丘面を細かく観ると標高45m前後に段丘面が分けられ標高40m代と標高30m代の段丘面が確認できる。上記遺跡群を段丘面毎に列記してみると、上段段丘面には城ノ腰遺跡・東原遺跡・中原遺跡・高田上ノ段遺跡・溝ノ口遺跡・今坂遺跡・吉岡原遺跡・瀬戸山I・II遺跡がそれぞれ占地しており、下位段丘面には吉岡下ノ段・瀬戸山III遺跡・花ノ腰遺跡・高田遺跡・女高遺跡の一部、さらに下位段丘面の下位段には女高遺跡の南側部分がそれぞれに占地している。

次にこれら遺跡群の継続性を表面採取資料により検討してみると、⁽¹⁾

- a. 縄文時代晩期末に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……瀬戸山II遺跡



第2図 遺跡の周辺地形

- b. 縄文時代晩期末に成立し古墳時代中期以降まで継続する遺跡……………吉岡下ノ段遺跡
- c. 弥生時代中期に成立し弥生時代中期で終結する遺跡……………なし
- d. 弥生時代中期に成立し弥生時代後期まで継続する遺跡……………なし
- e. 弥生時代中期に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……………女高遺跡
- f. 弥生時代後期に成立し弥生時代後期で終結する遺跡……………中原遺跡
- g. 弥生時代後期に成立し古墳時代前期まで継続する遺跡……………東原遺跡・溝ノ口遺跡・今坂遺跡・吉岡原遺跡・高田上ノ段遺跡・瀬戸山Ⅰ遺跡・瀬戸山Ⅱ遺跡・花ノ腰遺跡
- h. 弥生時代後期に成立し古墳時代中期以降まで継続する遺跡……………城ノ腰遺跡・高田遺跡



遺跡の遠景



遺跡近景（調査前）

である。これらの状況は、実際に調査をした結果得られたものによる状況でなく、前もって表

記したようにあくまで表面採取資料に基づく遺跡の継続性である。このことを前提条件として、吉岡原・高田原における弥生時代の遺跡の動態を地形を加味して探ってみると次のようなことが言えないだろうか？つまり、継続期間の長い二つの遺跡、瀬戸山Ⅱ遺跡と吉岡下ノ段遺跡が原の東と西の端にそれぞれ存在しており、弥生時代後期になって吉岡下ノ段遺跡が高田上ノ段遺跡・中原遺跡・城ノ腰遺跡・東原遺跡を生み、瀬戸山Ⅱ遺跡がまず女高遺跡を生みさらに高田遺跡を生み、また瀬戸山Ⅱ遺跡は一方で今坂遺跡・溝ノ口遺跡・吉岡原遺跡・瀬戸山Ⅱ・Ⅲ遺跡・花ノ腰遺跡を生んだ。瀬戸山Ⅱ遺跡と吉岡下ノ段遺跡が他の遺跡の母体として……。 (こうした状況(つまり弥生時代後期になって遺跡の数がグーンと増える)は、掛川市域全体に観られる現象である。)そしてこの増加が吉岡原・高田原に人口増を招き、やがては和山岡古墳群という酋長墓(?)を生む集団へと転化していったのではないだろうか？

このような歴史背景の中、瀬戸山Ⅰ遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期を中心に営まれた集落である。

(参考文献)

- (1) 佐藤山紀男「弥生時代の遺跡の概要」『掛川市遺跡分布調査報告Ⅰ』掛川市教育委員会(1984)

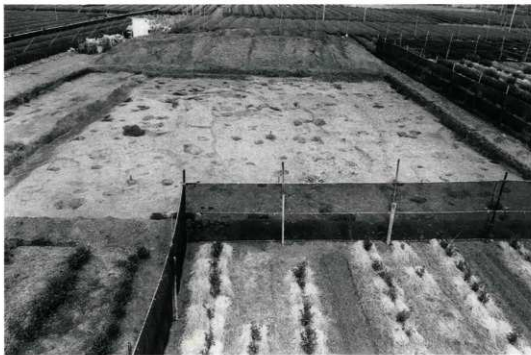
2. 調査の内容

今回の調査では、竪穴式住居跡（SB）20軒・掘立柱建物跡（SH）4棟・小穴（SP）多数・溝状遺構（SD）8条等を検出している。この数は調査面積当りの遺構検出量として密度の濃いものである。遺構確認当初、調査区内全面に遺構が切り合って存在する状況であった為、本調査ではすべての出土遺物に対しドットマップ化を施し、遺構の切り合いならびに遺構の存在を確認する資料とした。こうして出土した遺物は、縄文時代中期後葉期の石器・土器片、弥生時代後期後半～古墳時代前期の土器群、近世陶器片等を中心に全部でポリコンテナ（545×336×200）32杯分であった。

確認した遺構と出土した遺物を照合した結果、遺構の大半は弥生時代後期後半～古墳時代前期に構築されたもので、今回の調査地点が該期における集落の住居密集地であることが確認された。今回の報告では、調査内容の概要として遺構・遺物について報告する。

《遺 構》

この項では上述した遺構について、時代毎に分けてそれぞれの概要を述べることとする。



調査区完掘状況（南から）

①縄文時代中期後葉

今回の調査では該期に属する土器片6点(今後行う整理調査で実数をはっきりさせたい)、石鏃2点、石錐1点、不定形石器1点であるが、これらはいずれも確定できる遺構からの出土でない。周辺で当該期の遺物を採取していることをあわせて、当該地点付近に縄文時代中期後葉の集落痕が確認できるものと考えている。

②弥生時代後期後半～古墳時代前期

当該地点で検出した遺構のほとんどが該期に属するものである。竪穴式住居跡(SB)20軒・掘立柱建物跡(SH)4棟・小穴(SP)のほとんどがそうであるが、現時点ではすべての遺構について帰属する時期は判明できていない。今後整理を行う上で解決していきたい。

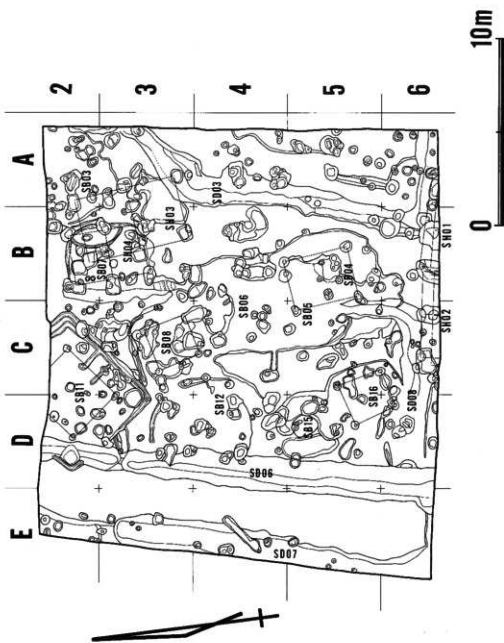
そこでこの項では、調査時に帰属する時期の判明している、竪穴式住居跡SB07とSB11そしてSII04についてのみ概略述べることにする。

竪穴式住居跡SB07は出土遺物からおおむね弥生時代後期後半(菊川式期)のもので、SB11は古墳時代前期前半(古式土師器期)のものと考えている。

SB07の平面形は楕円形に近い形状をしており、確認面での規模は長径4m72cm・短径3m72cm(住居跡西側はSD04により擾乱を受けている為推定規模)・深さ11cmを測る。壁溝は住居跡東壁から北壁にかけてのみ検出しているが後世の擾乱が考えられることから、住居跡壁際全面に存在したと思われる。支柱穴は、第4区中で実線を結んだ柱穴が相当するものと思われる(4本主



調査区完掘状況(西から)



第3図 遺構全体図

柱型)。炉は床面上から貼床を貫く形で造られた地床炉で、炉南側縁には長さ30cm幅10cm程の大ききの河原石が1つ貼ついで出土している（当地方の縄文時代後期中葉の竪穴式住居跡に認められる石囲い炉と同じような形状で検出した）。炉の位置は、南側に住居跡入口部を想定したならば、住居跡中央部から奥壁に寄った位置に検出している。床面は、ローム質の黄褐色土を大量に含む土によって貼床が形成されていた。

S B 11は北側部が未調査の為明確でないが、平面形は方形、確認面における規模は推定で長径6 m76cm・短径6 m24cm・深さ12cm程度を測る住居跡である。壁溝は全面に確認できているが、南側から北東側にかけては二重に溝が確認された。これに伴う有様での柱穴は確認できていないが住居の拡張の結果二重の溝が造られたものと思われる。主柱穴は、第5図中に実線で結んだ柱穴が相当するものと思われる（4本主柱型）。炉は検出確認できていない。

以上がS B 07とS B 11との状況である。これらは先述したようにS B 07が弥生時代後期後半菊川式土器を出土した住居跡で、S B 11が古墳時代前期古式土師器を出土した住居跡である。住居跡の特性として共通した状況を示しているが、平面形において決定的な違いを示している。今年度行っている吉岡原遺跡においても同じような報告がされており、今後整理調査する上での課題としたい。

次にS H 04であるが、調査時における土層観察でS B 07よりも新しい構築であることを確認している。規模は、尺度の問題は後の検討課題として間口2間・奥行3間の6本柱による掘立柱建



SB07 完掘状況（南から）



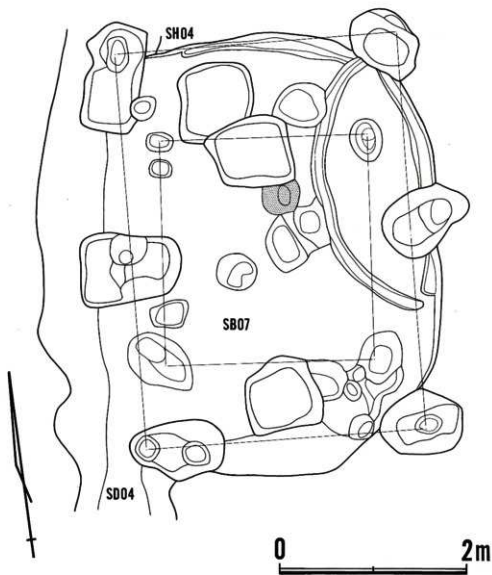
SB11 完掘状況（南東から）



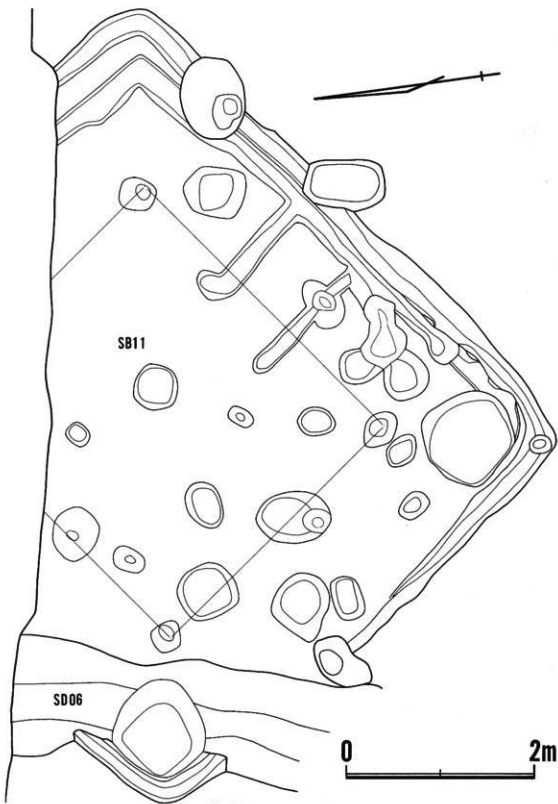
SB07 完掘状況（東から）



SB11 完掘状況（南西から）



第4図 SB07 平面実測図



第 5 图 SB11 平面实测图

物跡と確認している。構築時期は明確でないがS B07よりも新しい弥生時代後期後半菊川式から古墳時代前期初頭の時期であると考えている。掘立柱建物跡については、今次調査において全部で4棟確認しているが、規模・構築時期・集落内における配置等今後の課題としたい。

③近世

今回の調査で出土した近世の遺物は全て陶器片である。またこれら遺物を出した遺構は全て溝状遺構（SD）である。出土遺物の無かった溝状遺構についても覆土の状況からおおむね同時期のものであろうと考えている。

調査では溝状遺構を8条確認しているが、SD02～07は南北方向に向く溝で、SD01と08は共に東西方向に向く溝である。尚調査ではSD01と08を別の取り扱いをしたが位置関係から同一溝の可能性ある（第3図参照。遺構名称は図が煩雑化することをおそれ省略しているが、SD01の位置は調査区南壁際SH02・01の付近及びその東側に掘り込まれている遺構である）。

ここでは最も規模・形状のはっきりしているSD06について紹介しておく。SD06は、調査区の西側付近のDグリッド列からEグリッド列にかけて検出した溝状遺構である。確認面における規模は、幅1m90cm前後・深さ40cm前後を測り北から南に向かって緩く傾斜している。また溝は調査区の北及び南側にそれぞれ延長されるもので、全体の長さ・向きについては確認できていない。溝の覆土は黒色土でしまりのない土と下層の暗褐色土との二層で構成されるのが基本であり、



S D06 発掘状況

土層観察でも明らかなように、他の遺構（前述した住居跡群）よりも新しい構築物である。出土遺物は、他時期の遺構から流れ込んだ弥生時代後期から古墳時代前期に属する土器破片と、近世陶器片のみであった。ここでは、近世期に造られた溝と考えている。

尚、溝の機能であるが、他に参考資料となるべくものが検出していないことから、今のところ不明である。

以上が今次調査により明かとなった遺構の概要である。個々の詳細な説明と遺構の分布状況等報告すべきことは多々あるが、本報では検出した遺構のほんの一部について簡単に触れ、全体の概要に代えた。



SB07 遺物出土状況（西から）



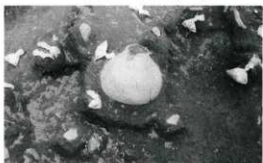
SB08 炭化物出土状況



SB08 遺物出土状況（東から）



SB11 遺物出土状況（南西から）



SB08 遺物出土状況（微細）



SB11 遺物出土状況（微細）



SB08 遺物出土状況（微細）



石器出土状況

《遺物》

今回の調査で出土した遺物は、ほとんどが土器の類である。出土土器の総量はポリコンテナ(545×336×200) 32杯程で、調査面積の割合からするとかなりの量と言える。それらの中には完形、もしくはそれに準ずるものも多く含まれているが、大半は小破片である。また遺構間での切り合い(特に住居跡と住居跡)が激しいため小破片の土器については、遺構との所属関係が未だ明確でないものもある。それらについては現在整理中である。

出土遺物を時代的にみていくと、縄文時代中期後葉、弥生時代後期～古墳時代前期に属されるもので、特に古墳時代前期のものについては、住居跡からの出土でかなりまとまりがあり、集落を考えるうえで、重要な資料を提示してくれた。

次に各時期の遺物を大まかにみていくと、縄文時代中期後葉の遺物は、土器片6点、石器4点(黒曜石製の石鏃3点、珪質頁岩製の石鏃1点)で、それらのほとんどは該期の遺構を伴っておらず、後世遺構への流れ込みである。

弥生時代後期～古墳時代前期の遺物はすべて土器であり、厳密には後者に属するものが大半を占め、前述のようにその多くはS B08・11をはじめとする住居跡からの出土である。

近世期の遺物はいずれもS D06・07等のほぼ南北に走る溝状遺構からの出土で、壺、甕等の陶器片である。

今回は紙面の都合上すべての遺物について紹介することはできないため、完形、それに準ずるものを抽出し、第6・7図に図示した。以下番号順に説明していく。

1～7はいずれもS B08からの出土土器である。そのうち1～3は壺形土器である。

1は口縁部を2/3程欠くが、その他はほぼ完形である。口縁部は直線的に開き、頸部はやや丸味を帯びながら「く」の字に屈折する。胴部は球形に近い。口唇部と頸部には強いナデ、口縁部には縦位のハケ目が施されている。胴部上半は縦位のハケ目、部分的にナデ消しを施す。胴部下半は縦位のハケ目調整の後ヘラ状工具による横位のミガキを施しているが、ミガキ調整前のハケ目がかなり認められる。内面には口縁部から頸部にかけて強いナデが認められる。また胴部外面には篋目の痕跡が、底部には葉脈痕が認められる。

2は口唇部及び口縁部上半を欠損するが、頸部以下は遺存する。頸部は1同様あまり鋭く屈折せず、胴部は下ぶくれである。外面調整は1と同じであるが、1よりやや摩滅が著しい。頸部に貼り付けによる突起が1個認められる。内面は頸部から胴部にかけてナデ、胴部下半から底部にかけては斜位のハケ目が施されている。

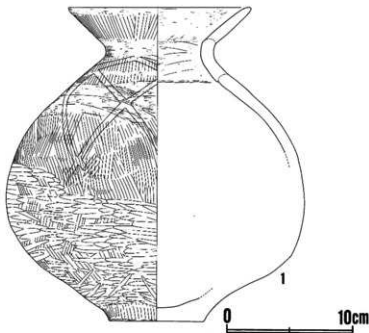
3は胴部の一部を欠損する。頸部は「く」の字に折れ、胴部はほぼ球形を呈す。口唇部付近には強いナデ、頸部から胴部上半に欠けては斜位のハケ目が施される。胴部下半にはハケ目調整の後ナデ消しを施している。内面は口縁部がナデ、胴部上半と底部にハケ目、胴部中位には板ナデがそれぞれ施されている。

4～7はいずれも台付甕形土器である。4は口径12.6cm、器高15.5cmを測るやや小型の台付甕である。口縁部やや外反しながらほぼ垂直に立ち上り、胴部は球形に近い。脚部は内彎ぎみに開く。外面には全体に縦位、もしくは斜位のハケ目が施されており、脚部についてののみハケ目調整後のナデ消しが認められる。内面には口縁部と脚部に横位のハケ、胴部に板ナデが施されている。

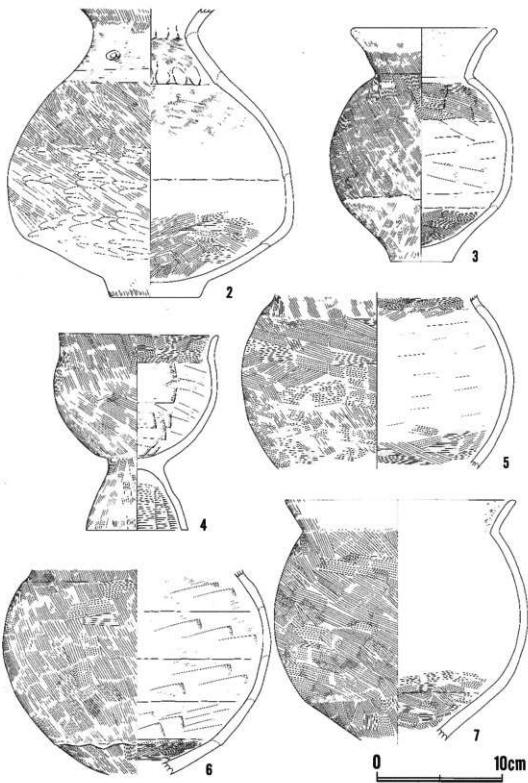
5～7は作り、法量、器面調整等いずれも類似する。5は口縁部と底部を欠損する胴部片で、ほぼ球形を呈す。頭部の縦位のハケ目以外は、斜位のハケ目を施しており、頭部・胴部下半にはハケ目調整後ナデ消しが施されている。内面は頭部と底部にハケ目、胴部にはナデ・板ナデを施している。6も胴部片である。器面調整は5に類似するが、全体的にやや摩滅している。

7は底部と口縁部の大半を欠損している。口縁部は「く」の字に外反し、胴部はほぼ球形を呈す。口縁部には内外面ともに顕著なナデが認められる。胴部には5・6同様縦位・斜位のハケ目が施されている。

以上が今回の調査において最もまとまった土器群である。個々の土器の特徴からこれらは、古墳時代前期に属すものと考えられる。最後にこの土器群の出土状況について若干ふれておきたい。これらの土器は前述のようにすべてSB08からの出土土器である。本住居跡の覆土中には、焼土層がかなりの層厚、範囲にわたって認められ、その焼土中及び焼土付近よりこれらの土器が出土した。いずれも破片はほとんど散在しておらず、土圧で押し潰されたような有様で、出土位置からはいくつかのグループに大別することができる。これらの出土状況からその解釈として、住居廃絶時、焼失時における遺棄、その後の廃棄が考えられる。しかし、単にそれらを肯首し難い点もあり、今後の検討を要す問題でもある。今回は個々の土器の出土状態の分析を行っていないので、言及はさけるが、本住居跡の性格を考えるうえで、特に該期の住居跡における土器の大量廃棄の興味深い一事例として、とらえたい。



第6図 出土遺物実測図(1)



第7图 出土遺物実測図(2)



出土石器①



出土遺物（縄文土器片）



出土石器②



SB08 出土土器



出土石器③



同上土器（微細）



出土石器④



SB08 出土土器



SB08 出土土器



SB08 出土土器



SB08 出土土器



SB08 出土土器



SB08 出土土器



SB08 出土土器



SB08 出土土器



SB08 出土土器

3. ま と め

以上述べてきたとおり、今回の調査では遺構は伴わないが縄文時代中期後半の時期の遺物が出土し、弥生時代後期後半から古墳時代前期の土器を出土した竪穴式住居跡2軒・掘立柱建物跡4棟・小穴多数を検出、あるいは近世陶器片を出土した溝状遺構を8条確認している。調査面積が決して広くない広さであるが、かなり密度の濃い検出状況を示した。しかし本報では、諸事情により全てを報告できない。

そこでここでは、今回の調査で得られた成果をまとめ、それらを今後の整理・報告に向けての指針としたい。

1. 調査区からは縄文時代中期後半期に属す遺物が出土している。今一度出土資料を見直し出土状況を明らかにすると共に、周辺地での調査の機会を待って瀬戸山I遺跡における当該期の状況を明らかにしていきたい。
2. 遺構検出状況から当該地点は、弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての瀬戸山I遺跡（集落跡）の中心地付近であることが判明した。
3. 検出した遺構の内竪穴式住居跡は保存状況の良いものが多く、遺物も安定した状況で出土したものが多かった。これは、当該期における遺構の状況を示す好資料となるばかりでなく同時に遺物（特に土器群）の細分資料と成り得るものと考えられる。
4. 調査面積が狭いことから遺跡のほんの一端を検出したものであるが、遺構の切り合い関係が比較的明瞭であった為、一村番内での遺構の動態を知る好資料を得た。
5. 近世陶器を出した溝が確認されたことにより、当該地点付近に近世期の遺跡が存在するものと予測される。

以上である。

瀬戸山 I - a 遺跡発掘調査概報

昭和62年3月30日

編集 掛川市教育委員会
発行 掛川市教育委員会
印刷 静岡市中村町166-1
株式会社 三 創
TEL 0542-82-4031

T436-03

静岡県掛川市上西郷4116

掛川市教育センター

電話<05372>9-1508